

ひらがほそまち 平賀細町遺跡

－発掘が語る古代印旛の集落跡－

囑託調査研究員 天本昌希

平賀細町遺跡の立地

平賀細町遺跡は印旛村の南東、平賀地区の標高約25mの台地上に立地する。本遺跡から北東方向に北印旛沼を望み、現在は緑鮮やかな美しい田園風景が広がっている。このような現在の印旛沼の姿は近世以降の干拓によるものであり、それ以前は現在の印旛沼、利根川、霞ヶ浦までを取り込んだ「香取の海」と呼ばれる広大な内海を形成していた。本遺跡は現在の印旛沼を北と西に分けるように半島状に突き出た台地の東岸に立地している。「香取の海」の時代には岬のような場所であったことが予想される。このように豊かな水源は人々に恵みをもたらし、古くから人々の生活の場となった。そのため、そこには多数の遺跡がのこされており、道路建設や宅地造成などの開発によって様々な遺跡が発見されている。

集落の概要

今回の平賀細町遺跡の成果は、平成7年度に土砂採取工事に伴い実施された調査と、平成18年度に道路拡幅工事に伴い実施されたものである。調査面積はあわせて8,357㎡であり、82軒の住居跡を検出し、古墳時代後期（6世紀）から奈良・平安時代（8・9世紀）の集落の様子が明らかとなった。

平成7年度の調査区は台地の南東端部を調査し、65軒の住居跡と5棟の掘立柱建物跡などを検出した。住居跡は調査区内に全体的に分布している。

平成18年度の調査は、東西に細長くのびる調査区となっている。17軒の住居跡と1棟の掘立柱建物跡を検出しているが、調査区の東側に遺構が集中し、西側の谷が入り込み台地幅が狭くなる西側からは遺構分布は希薄となる。ここを集落の西端とし、

台地縁辺部まで集落が広がっているものと思われる。それでは集落の様子を年代順に追ってゆこう。

6世紀～7世紀の集落

<6世紀>集落は6世紀の後半に始まり、住居数は8軒である。印旛地域を含む東国全体は、6世紀に入ると、それ以前に比べ、爆発的に集落数が増加し、大規模な人々の移動が考えられる時期である。

<7世紀>集落は最盛期を迎え、検出した住居数は34軒に急増する。この時代は、中央政権の影響がこの地にまで及んでいたことをうかがわせるものがいくつか存在し、次代への変革を予想させる。では、注目すべき2点の遺物をみてみよう。

1つは、平成7年度調査46A住居跡から出土した畿内産土師器である。精製された胎土に暗文と呼ばれる装飾的なミガキを施したこれらの土器は、畿内における土師器研究では飛鳥Ⅲ類に分類され、7世紀中葉の年代が与えられている。東国においては所有者と中央との結びつきを想定させ、威信財としての意味合いも持っていたことであろう。畿内産土師器は時代が下ると出土数は増えるが、7世紀中葉のものは県下でも数遺跡しか出土していない。近隣の遺跡では成田市囀護台遺跡、佐倉市江原台遺跡、同市大崎台遺跡などで出土している。

2つめは、平成7年度調査49A住居跡から出土した、縁辺が円弧状を呈する矢羽根形の飾金具である。同様のものは長野県コウモリ塚古墳から馬具として報告されているほか、奈良県飛鳥池遺跡、同県平城京跡、大阪府細工谷遺跡などといった生産工房遺跡で出土している。特殊な形で類例は少ないが、正倉院にも同様のものが伝わっていることから、7世紀から8世紀中頃までの使用が想定できる。馬具、

帯などにつけられたと思われるが、具体的な装着方法は推測の域をでない。一方でその分布を見ると、近畿地方の遺跡での出土が多く、それが東国で出土するという事は中央との関連をうかがわせるものといえよう。本遺跡のものは、共伴する土器から7世紀後半であることが想定できる。近隣の遺跡では成田市加定地遺跡、佐倉市高岡大山遺跡などで出土している。

また、台地の東側に隣接する独立丘上に存在している花島古墳群は、集落の有力者層の墓と考えられる。一方、その古墳群から少し南の台地の裾部には神津横穴が存在している。未調査のため詳細は明らかではないが、これらも集落の墓と考えられる。古墳という従来から続く墓制に対し、横穴墓はそれよりも新しく関東地方に伝わったものである。これも新しい波が伝わったことを示すものといえよう。

8世紀以後の集落

<8世紀>この時期は、集落の規模は縮小の傾向を見せるものの、それでも16軒の住居跡を検出した。

平成18年度調査11号住居跡から出土した須恵器の蓋は、つまみの部分が環状になるものである。このようなものは、東日本では群馬県の須恵器窯で特徴的に見られるものである。

<9世紀以後>住居数は8軒であり、全体的な傾向として住居数は減少している。

平成7年度調査43D住居跡では、初鑄818年の皇朝十二銭のひとつ「富寿神宝」が出土している。年代の上限を与える重要な資料であり、県内では数遺跡で確認されている。古代の銭は貨幣として流通していた可能性は低く、祭祀などに用いられる特別なものと考えられる。また、平成7年度調査37A住居跡からは、仏鉢形土器が出土している。仏教が伝わるとともに、仏具として用いられたものである。

集落はこの時代で終焉を迎える。調査区の一部では、その後の時代の墓が検出しているものの、居住した痕跡は見つからなかった。人々は周辺の集落や台地の下など、他の場所へ移住したことも考えられよう。

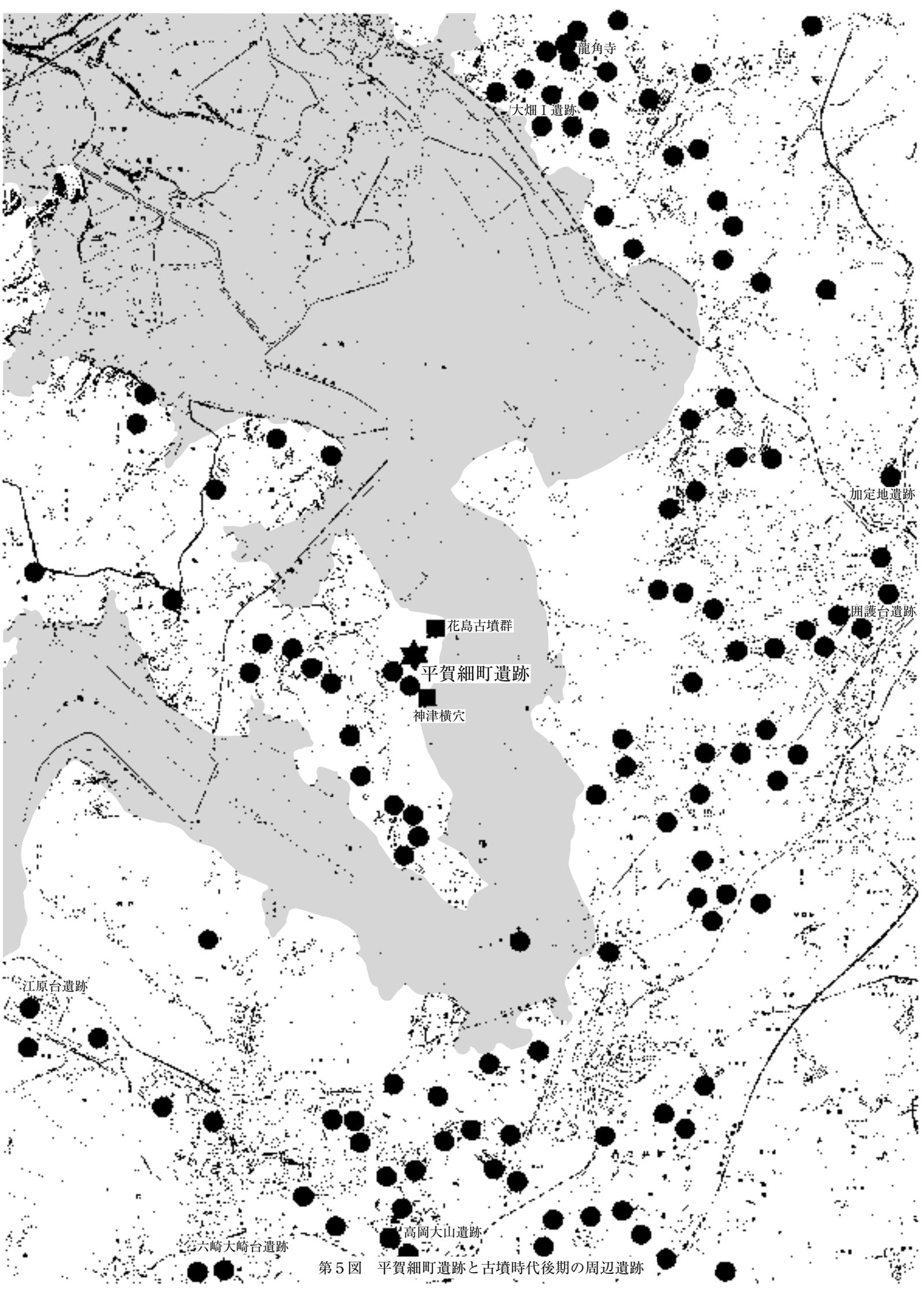
まとめ

周辺の発掘事例をみると、成田市の圀護台遺跡群や公津原遺跡群では、本遺跡と同時代の住居跡が数百軒も検出されている。また、栄町には7世紀に造営された岩屋古墳と龍角寺、8世紀には埴生郡衙推定地である大畑I遺跡などが存在している。このことから、成田市や栄町といった印旛沼の東岸地域が当時の印旛沼周辺における中心地であったことが想定される。

本遺跡の規模はそれらのものと比べると、決して大きいとはいえない。では、なぜ上記の大規模な遺跡と同じものや、そこから発見されていないものが出土したのであろうか。冒頭で述べたように、本遺跡は印旛沼（「香取の海」）に半島状に突き出た場所に位置している。「香取の海」とそれに注ぐ河川により、広範囲で活発な水上交通が行われ、これらの品々をもたらしたのではないだろうか。本遺跡の成果は、印旛地域の交通、流通を考える上で重要な役割を果たすものと思われる。今後の資料の増加と整理作業の進展を待ちたい。



平賀細町遺跡 平成7年度調査区空撮



龍角寺

大畑I遺跡

加定地遺跡

圓護台遺跡

■ 花島古墳群

★ 平賀細町遺跡

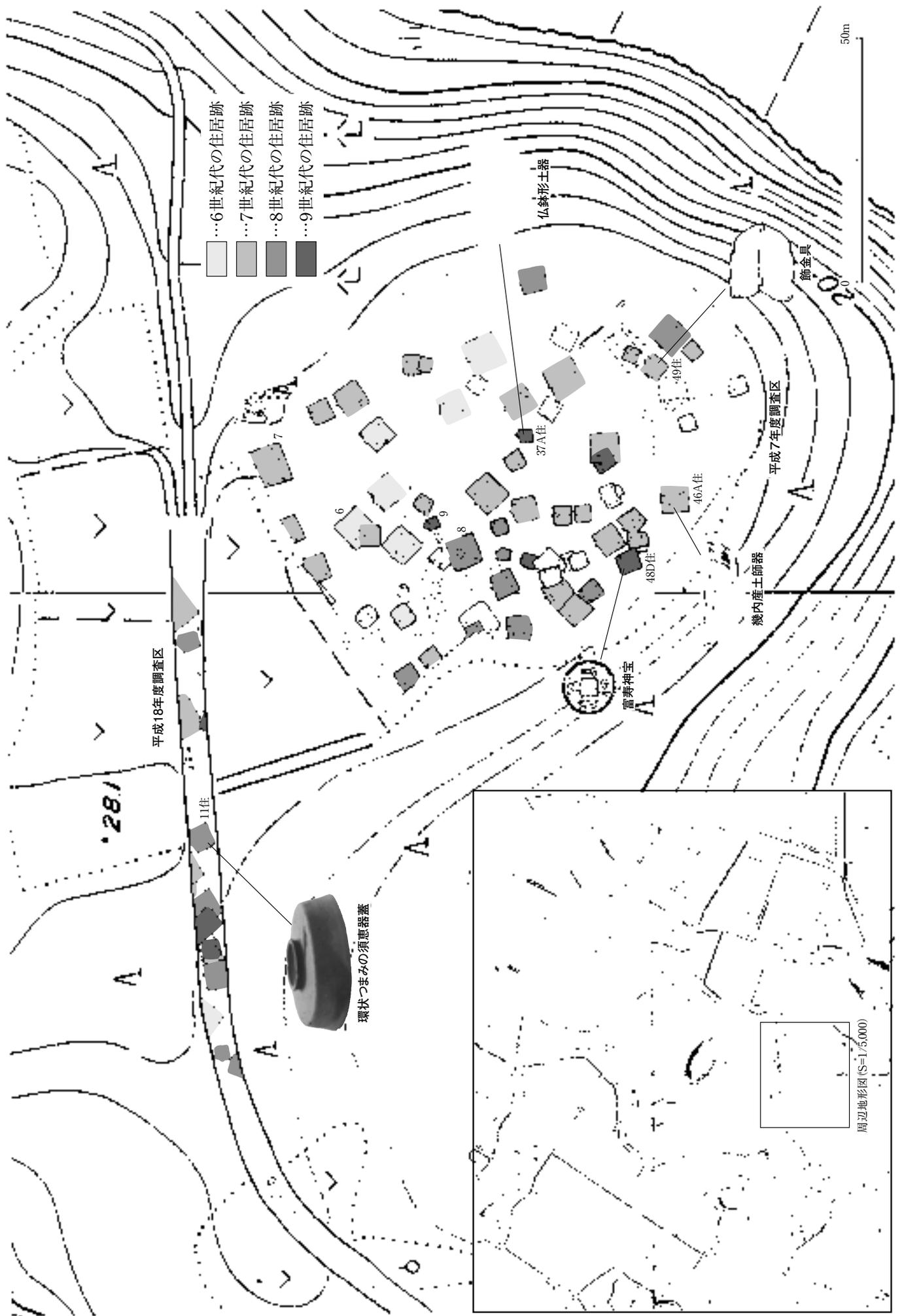
■ 神津横穴

江原台遺跡

六崎大崎台遺跡

高岡大山遺跡

第5図 平賀細町遺跡と古墳時代後期の周辺遺跡



第6図 平賀細町遺跡遺構配置図 S = 1/1,000